

「サダコの鶴」きっかけつくった元淑徳高生

60年後の祈り 再び広島へ

広島市の「原爆の子の像」のモデルとなった佐々木禎子さんに折り鶴を折るきっかけを与えた愛知淑徳高校(名古屋市中千種区)の当時の女子生徒五人が、禎子さんの命日の二十五日、約六十年ぶりに広島を訪ねる。原爆症のため十二歳で亡くなった禎子さんが回復を祈って鶴を折り続けた悲しい物語は、絵本などで世界中に読み継がれてきた。卒業生らは再び千羽鶴を折り、禎子さんにさげる。

(社会部・浅井俊典)

命日のあす訪問

今日二十一日、淑徳高校に卒業生が集まり、教室で鶴を折った。「あのころは物資が不足してセロハンや包装紙がなかった。折り紙を使える時代になったのよね」。当時高校二年で、校内の青少年赤十字団(JRC)の団長だった高橋登

代子さん(セモ)が、うれしそうに指を動かした。

一九五五(昭和三十)年、原爆症で倒れた東京の男子高校生を知ったJRCの生徒たちが、戦後十年たって原爆に苦しむ人々を励まそうと、四千羽の鶴を折って原爆の日に合わせて広島に送った。うち一房が闘病中の禎子さんに届き、禎子さんは亡くなるまで千羽鶴を折り続けた。

当時、卒業生たちは千羽鶴が禎子さんに届いたことを知らなかった。四十年以上たった九八年ごろになって、禎子さんの物語を絵本にしようとした作家から問い合わせを受け、初めて知

ったという。高橋さんは「私たちの千羽鶴がきっかけで世界中から折り鶴がさげられるようになるなんて思いもしなかった。生きたい、生きたいと鶴を折り続けた禎子さんを思うと、涙が止まらなかった」と話す。

戦後七十年の今夏、愛知県内の高校生の前で当時の話を語った卒業生の一人が広島行きを提案した。淑徳高校の元教諭の協力で、禎子さんの母校、戦町小学校で命日に合わせて開かれる集会に参加するほか、原爆資料館に展示されている禎子さんの手による折り鶴を見学する。

みんなで広島に行くのは高校の修学旅行以来。中村ゆき江さん(セモ)は「禎子さんが生きていたら私たちと同じ七十代。できるなら会って話をしたかったけれど、ゆかりの場所を訪れるだけでも大切な人に会える

よつな気がしてさきさきと「ます」と語った。



①広島に持っていき千羽鶴を折りながら、当時を振り返る(左から)近藤勝代さん、杉浦都さん、高橋登代子さん、中村ゆき江さん②名古屋市中千種区の愛知淑徳高校で(鴨田夫撮影)③折り鶴を送った当時の写真。前列左から近藤勝代さん、高橋登代子さん。後列中央は杉浦都さん④同高で



禎子さんと折り鶴 佐々木禎子さんは2歳のときに広島市の自宅で被爆し、小学生で白血病を発症。「千羽折れば病気を治せる」と信じて鶴を折り始めた。1955年10月25日に12歳で亡くなった。死後、同級生らが全国から寄付金を集め、「原爆の子の像」が建立された。「サダコと折り鶴」は原爆の悲劇を伝える物語として広がり、像には今も世界中から千羽鶴が届けられている。